

2023年度（2024年3月期）第3四半期決算発表説明会

Q&A

Q1：12月に米国ロッククリフ社の全株式取得という大規模な投資決定をされたが、これによるBSへのインパクトと収支影響をどのようにみているか。

A1：BSの取り込みは今回の2024年3月期第3四半期の決算で行っており、インパクトとしては連結BS全体を4千億円超押し上げている。この内の多くの部分は鉱業権である。負債の連結もある。また、本件取得にあたり、手元資金に加えて有利子負債調達により一時的に取得に関わる費用に充てているため、有利子負債の増加がある。

収支影響としては、2025年3月期からの利益貢献を見込んでいる。足元でHH価格は低位に推移していることは認識しているが、ヘッジの活用等の手段もあわせ、安定的な収益を確保していく。今後、売却予定である豪州上流事業に代わるレベルの利益を期待している。

中期的にはマーケットの状況を捉えて管理する体制が重要であると考えており、東京ガスアメリカにおける体制強化を図り適切に対応していく。

Q2：PBR改善に向けて、次年度以降も継続的にROE8%以上を実現するためには、今年度と同等の利益水準が必要と考えられる。今年度はスライド差のプラス影響を700億円超含んだ経常利益1,900億円であり、次年度以降持続的にこの水準の利益を出すための取り組みの方向性を教えてほしい。一方で、大型の海外上流事業への投資によるマーケットリスク等、リスク量は増加している中、目指すROEの水準についてどのように考えるか。

A2：リスクの高まりを踏まえたリターンが必要との認識をしており、マーケットの目線としてはROE8%以上の水準が求められるものと考えている。次年度会社計画において、事業ポートフォリオマネジメントの観点から、各カンパニー・事業会社の効率性・収益性向上策を織り込み取り組んでいく。

Q3：北米シェールガス資産の取得によりD/Eレシオは0.93と高まってきているが、よりレバレッジを効かせていくのか。資本コストや株価を意識した経営の実現に向けて、D/Eレシオ0.9を適正水準と捉えているのか、今後変化するのか。

A3：当社においては、D/Eレシオ0.9程度を財務規律および資本規律と考えている。その観点では、ロッククリフの取得という大規模な投資を実施したが、なお適正基準にあると認識している。デットとエクイティのバランスとして、規律を持って維持していく。

以上